

第94回 記者懇談会実施概要

- 1 日 時 2014年1月29日(水) 15:00～17:00
2 場 所 関西大学千里山キャンパス 100周年記念会館 第2会議室
3 内 容

(1) 研究発表・質疑応答(15:00～16:00)

- ・大木 清弘 商学部助教

発表テーマ「日本本国からの量産活動の撤退は何をもたらすのか

—日本企業の海外子会社への影響—

- ・工藤 宏人 化学生命工学部准教授

発表テーマ「セシウムをはじめとする金属イオンを吸収する

カップ型高分子材料の開発」

(2) 学内状況説明・情報交換(16:00～17:00)

- ① 2014年度入学試験 志願者状況について 資料1
② ICTを活用した遠隔地への学習支援事業の本格運用開始について 資料2
③ 「東北わくわくマルシェ」への参画について 資料3
④ 平成25年度卒業式及び大学院学位記授与式ならびに
留學生別科秋学期修了式の挙行について 資料4
⑤ 高橋大輔さんと町田樹さんの応援会開催について 資料5
⑥ 堺市との地域連携事業による総合情報学部学生の取組みについて 資料6
⑦ 大学が地域に及ぼす経済効果について 資料7
⑧ 関大生の活躍について 資料8

4 大学側出席者

楠見晴重学長、黒田勇副学長、木谷晋市副学長(兼入試センター所長)、
西村枝美学長補佐、大木清弘商学部助教、工藤宏人化学生命工学部准教授、
与謝野有紀社会学部教授、福田聡入試広報グループ長、
藤本清高広報室長、中川雄弘広報課長、宮武明生学長課長 他

5 参考資料

- (1) 関西大学通信 第428号、第429号
(2) 関西大学ニューズレター「Read」第35号
(3) 平成25年度関西大学特別講座 チラシ
(4) 行事予定表(2月～3月)

以 上

【次回(第95回)記者懇談会開催予定】

日 時: 2014年3月12日(水) 15:00～17:00
場 所: 千里山キャンパス 100周年記念会館 第2会議室

日本本国からの量産活動の撤退は何をもたらすのか

－日本企業の海外子会社への影響－

商学部助教 大木 清弘

【概要】

「東芝、大型冷蔵庫の開発・製造拠点の大阪工場を2008年3月までに閉鎖し、中国へ移管。洗濯乾燥機などを製造している愛知工場を、2009年末までに閉鎖して中国に移管」

「ソニー、美濃加茂工場を2013年3月期末に閉鎖。携帯電話は国内生産をやめ、海外で生産するスマートフォンに経営資源を集中」

近年、こうしたニュースを頻繁に聞くようになった。激化する国際競争に対応するために、多くの日本企業は、日本本国の量産拠点を閉鎖するという、苦渋の決断を強いられている。量産活動のような労働集約的な活動は、労働コスト等の立地優位性を持つアジア地域等に移転する方が、全体の効率性が上がる。そのため、もはやコスト上の優位を持たない量産活動を日本から撤退し、海外に移管する企業が増えてきている。

日本本国から量産活動を撤退することは、これまで国内の産業空洞化の観点から批判されてきた。雇用や技術の維持のために、日本国として国内での量産活動を維持すべきであるという主張である。しかし、多くの日本企業は、主にコスト競争力の観点から、本国の量産活動を撤退することが、競争優位につながると考えている。国内産業のことを考えれば苦しいが企業の競争力のためにはやむを得ない—このように考えての意思決定であろう。

しかし、日本本国から量産活動を撤退することが、本当に日本企業の長期的な企業の競争力につながるのだろうか。本国から量産活動を撤退することが、長期的には企業の首を絞める可能性はないのか。本研究はそうした「長期的に首を絞める」可能性を、海外子会社への影響から検討するものである。

結論から言えば、海外子会社の成長に本国本社が強く関与してきた日本企業の場合、本国からの量産活動の撤退が、海外子会社（海外工場）の成長を阻害する可能性がある。つまり、本国から量産活動がなくなることで、そうした活動を譲り受けた海外子会社がパフォーマンスを向上できなくなるという、本末転倒な問題が起こりうるのである。

本研究はこうした可能性を、日本企業の海外工場へのケーススタディとデータを用いた定量分析から明らかにした上で、日本本国の量産活動に対して、日本企業はどのような意思決定をすべきかについて提案する。

【プロフィール】

1985年神奈川県横浜市生まれ。関西大学商学部助教。専門は国際経営論、国際人的資源管理論、経営戦略論。東京大学経済学部卒業、東京大学大学院経済学研究科修士課程、博士課程を経て、2011年から現職。経済学博士。主著は「ものづくりの国際経営戦略（分担執筆）」「新興国市場戦略（編著近刊）」。主要論文は「多国籍企業における本国拠点の優位再構築：国際的な機能配置選択に伴う拠点間競争の効果」『組織科学』45(2), 101-116。

セシウムをはじめとする金属イオンを吸収するカップ型高分子材料の開発

関西大学 化学生命工学部 工藤宏人

新技術の特徴と従来技術との比較

- ・ カリックスアレーン構造を有するポリマー（カップ型高分子材料）を、一段階で合成する方法を確立した。
- ・ セシウムなどの金属イオンを吸収する高分子材料の合成に成功し、成形加工性に優れ、応用範囲の拡大が期待される。
- ・ 本技術の適用により、カリックスアレーン構造を有するポリマーを大量合成することが可能になり、コストが 1/10 程度まで削減されることが期待される。

想定される用途

- ・ 達成されたポリマーの特異的空孔に着目すると、高選択的イオン透過および吸収材料への応用が可能と思われる。
- ・ 上記のイオン吸収材料において、セシウムイオンの選択的吸収効果が得られることも期待される。
- ・ また、達成されたポリマーの特殊構造に着目すると、レアメタル回収材料といった用途に展開することも可能と思われる。

実用化に向けた課題

- ・ 現在、アルカリ金属イオン、アルカリ土類金属イオンの包接性能について検討済み、他の金属（レアメタルなど）イオンの包接性能について検討予定。
- ・ 今後、機能性膜（イオン透過膜、イオン吸収膜）に適用していく場合の条件設定を行っていく。
- ・ 実用化に向けて、金属イオン包接能の選択性を向上できるような技術を確立する必要もあり。

発表者プロフィール

[氏名] 工藤宏人（くどう ひろと）

[所属] 関西大学 化学生命工学部 化学・物質工学科

[役職] 准教授

[経歴] 2000 年東京工業大学大学院総合理工学研究科博士後期課程修了、博士（工学）、2000 -2001 年山形大学大学院ベンチャービジネスラボラトリー講師（中核的研究機関研究員）、2001 年神奈川大学工学部助手、2007 年神奈川大学工学部助教、2009 年神奈川大学工学部准教授、2012 年より現職

[受賞歴] 高分子学会日立化成賞(2007 年)、合成樹脂工業協会・学術奨励賞(2012 年)